生きるを考えて

上松町赤沢自然休養林
身近な自然が失われていくなか、手つかずの自然が残した林の中には、多くの動植物が生息している。

縄文時代後期の成年女性の歯
（当館蔵）安曇野市北村遺跡
20～25歳の女性の歯には栄養障害などでみられるエナメル質減形成による溝が何本もみられる。

■「生きる」を感じる

人びとは何をもって「生きる」を感じるのでしょうか。1952年公開の黒澤明監督の映画『生きる』で、志村喬演ずる主人公は、死期を悟ってはじめて「生きる」を認識します。しかし時代によって生きることと、死との距離には大きな変化があったようです。

■自然の中の生と死

北村遺跡に埋葬された今から3,500年前の縄文人の歯には、栄養失調で死の危険ラインにまで達したことを示す成長の溝が、成人になるまでに6本もみられることがあります。狩猟や採集で生活をしていた彼らにとって、自然は恵みを与え生きるを実感させるものであると同時に、時には彼らを見放し牙をむけ命さえも奪ってしまうものだったのです。厳しい自然の中で、生と死は常に背中合わせであったといえます。そのため誕生を盛大に祝い、死を盛大に悲しんだとも想像されます。

上田市陣馬塚古墳
中央の石で造られた部屋（横穴式石室は）は、黄泉の国、そこへの入口だった。

■死後の世界を

古代では、人が死ぬと埋葬までの長い間、棺に遺体を安置し、死者がよみがえることを願いました。また、同時に死者との別れを惜しみ、遺体の腐敗や白骨化を見つめる「もがり」という儀式で死を確認しました。中国の歴史書『魏志倭人伝』にも、日本では人が死ぬともがりにつくことが記されています。この頃には死は少し遠くに認識され、「黄泉の国」の世界が創り上げられたのでしょう。

平安時代中頃になると、疫病の流行や律令国家の崩壊により、現世へのあきらめとともに、浄土信仰など死後の世界をどう考えるかが大きな課題となりました。この時代、極楽浄土を願って貴族を中心に惜しげもなく財力が投入され多くの寺院が建立されます。一般の人びとのあいだにも阿弥陀如来への信仰が広まっていきました。また、戦乱や政争での敗北者などの非業の死は怨霊となり伝染病や天災をもたらすものとして恐れられ、それを鎮めるために神として祀られることもありました。たとえば菅原道真の天神様が有名です。このように当時の人びとも死後の世界に関心を向け真剣に取り組んだのです。

阿弥陀如来立像（当館蔵）
阿弥陀如来は人びとが死んだ後、極楽浄土に導いてくれる仏として信仰の対象となった。

江戸時代の松本市深志神社（当館蔵）
「善光寺街道名所図會」に描かれた深志神社境内。諏訪社に並び、菅原道真を祀った天満宮（天神）様）が見える。

江戸時代の木曽おどり（『信濃奇勝録』当館蔵）
母親に背負われた赤ん坊から、子ども、お年寄りまで輪になって木曽おどりが踊られていた。

松本押絵びな「おどりに興じる人形」（当館蔵）
江戸時代後期から庶民の間で作られた人形。平面の人形型に彩色、衣装を貼りつけてある。生き生きとした子どもの姿が表現されている。

■現世に生きる

戦に明け暮れた時代が終わり、江戸時代の安定した社会になると、死後の世界から現世を生きることへの関心が高まります。間引きや捨て子などがよく話題になりますが、「食い初め」「初節句」のような産育儀礼が農村社会にもみられるようになり、子どもの健やかな成長に関心が高まったのもこの時代からです。親への孝行も奨励され、還暦、古稀、喜寿、米寿などの長く健康で生きるための長寿儀礼がおこなわれるようになりました。

近代になると上下水道の整備や、医療の発達などで、乳児死亡率の低下、病気による死亡数も減少し寿命も大きく延びました。しかし度重なる戦争で、多くの人びとが不本意な死を迎えました。

松本連隊の出征（長野県政史資料）
昭和の前半は度重なる戦争に、多くの兵士が市民の見送りをうけ戦場へ駆りだされました。

■これからを生きる

さて現在は、60歳の還暦（かんれき）など老いを通過点として天寿（てんじゅ）を全うして死を迎えることが当たり前になり、どのように老いを迎えるかが新しい課題になっています。反面、平成19年度で30,000人をこえる自ら命を絶つ人びとの存在は、物質面や医療面の充実にもかかわらず、心の問題が現代社会を生きていくことを難しくしていることを物語っています。

さらに、世界に目を向けると戦争、ききん、病気などでまだまだ多くの人びとが望まない死を迎えています。わが国の少子高齢化、地球規模の温暖化など、今までの人類が生きていくうえで経験したことのない環境が待っているのかもしれません。生きることを支える社会の知恵を知ることは、今後の人間の「生きる」を考える上で大きな意味を持つと思います。

（原　明芳）

保育園の子どもたち（長野県政史資料）
昭和20年代の保育園のおやつの時間。

小布施町新生病院
人生の終わりを安らかに迎えるためのホスピス。

参考文献（発行年順）

著者・編者	文　献　名	発　行　者	発行年
金井喜久一郎	「下高井郡の巣鷹」　『信濃』第２次11月号	信濃史学会	1942
長野県	『長野県のあゆみ　明治100年記念』	長野県	1968
小林計一郎	『長野市史考』	吉川弘文館	1969
長野県	『長野県政史　第１巻』	長野県	1971
信濃毎日新聞社開発局出版部	『長野県百科事典』	信濃毎日新聞社	1974
臼田町文化財調査委員会	『臼田町の文化財』	臼田町文化財調査委員会	1979
小林　済	『潤生　三帰寮・尚和寮100年の歩み』	社会福祉法人大勧進養育院三帰寮・社会福祉法人長野市社会事業協会　尚和寮	1983
社団法人日本助産婦会	『母子健康手帳の変遷とその時代的意義について』	社団法人日本助産婦会	1986
松本市	『松本市史　第二巻　歴史編　Ⅲ　近代』	松本市	1986
長野県	『長野県史　近代史料編　第８巻（一）』	長野県史刊行会	1987
長野県	『長野県史　近代史料編　第８巻（二）』	長野県史刊行会	1987
太田陽啓・小松芳郎	『図説・松本の歴史』	郷土出版社	1987
鈴木公雄	『古代史復元２　縄文人の生活と文化』	講談社	1989
長野県	『長野県史　近代史料編　別巻　統計（一）』	長野県史刊行会	1989
長野県	『長野県史　通史編　第６巻　近世３』	長野県史刊行会	1989
厚生省児童家庭局母子衛生課	『日本の母子健康手帳』	保健同人社	1991
五味文彦	『武士と文士の中世史』	東京大学出版会	1992
大塚初重　他	『信濃大室積石塚古墳群の研究Ⅰ』	東京堂出版	1993
勝田　至	「墓と寺はどのようにつくられたか」『新視点日本の歴史４　中世編』	新人物往来社	1993
(財)長野県埋蔵文化財センター	『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11－明科町内－　北村遺跡』	(財)長野県埋蔵文化財センター	1993
長野県立歴史館	『常設展示図録』	長野県立歴史館	1994
長野県立歴史館	『開館記念企画展図録　赤い土器のクニ』	長野県立歴史館	1994
森　安彦	『古文書が語る近世村人の一生』	平凡社	1994
菊池勇夫	『近世の飢饉』	吉川弘文館	1997
藤沼邦彦	『歴史発掘３　縄文の土偶』	講談社	1997
渡辺尚志	『江戸時代の村人たち』	山川出版社	1997
原　明芳	「信濃の古代墳墓」『長野県考古学会誌　86号』	長野県考古学会	1998
古川清行	『人物・遺産でさぐる日本の歴史４　平安京の貴族と文化』	小峰書店	1998
古川清行	『人物・遺産でさぐる日本の歴史９　江戸幕府と武士の暮らし』	小峰書店	1998
(財)長野県埋蔵文化財センター	『北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書４　長野市内　その１　篠ノ井遺跡群ほか』	(財)長野県埋蔵文化財センター	1998
長野県立歴史館	『ブックレット信濃の風土と歴史４　近世の信濃』	長野県立歴史館	1998
長野県立歴史館	『1999年度秋季企画展図録蘭学万華鏡　江戸時代信濃の科学技術』	長野県立歴史館	1999
鬼頭　宏	『人口から読む日本の歴史』	講談社	2000
くもん子ども研究所	『浮世絵に見る江戸の子どもたち』	小学館	2000
千曲市教育委員会	『千曲市森将軍塚古墳館ガイドブック』	千曲市森将軍塚古墳館	2000
(財)長野県埋蔵文化財センター	『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書５　長野市内　その３　松原遺跡』	(財)長野県埋蔵文化財センター	2000
塚本　学	『生きることの近世史　　人命環境の歴史から』	平凡社	2001
大藤　修	『日本史リブレット39　近世村人のライフサイクル』	山川出版社	2003
勝田　至	『死者たちの中世』	吉川弘文館	2003
水野正好　他	『朝日百科日本の歴史40　墳墓　死と再生の儀礼』	朝日新聞社	2003

著者・編者	文　献　名	発　行　者	発行年
山本博文	『切腹　日本人の責任の取り方』	光文社新書	2003
澁谷恵美子　他	『上溝11号古墳』	飯田市教育委員会	2004
岩田重則	『「お墓」の誕生　死者祭祀の民俗誌』	岩波新書	2006
児玉幸多	『近世農民生活史　新版』	吉川弘文館	2006
清水袈裟春	『たぐる糸の系譜　岡谷の製糸業』	清水袈裟春	2006
(財)長野県埋蔵文化財センター	『一般国道18号（坂城更埴バイパス）埋蔵文化財発掘調査報告書１　社宮司遺跡』	(財)長野県埋蔵文化財センター	2006
西村昇・日開野博・山下正國	『三訂版　社会福祉概論　ーその基礎学習のためにー』	中央法規出版	2006
白石太一郎　他	『大阪府立近つ飛鳥博物館図録45　横穴式石室誕生　黄泉国の成立』	大阪府立近つ飛鳥博物館	2007
澁谷恵美子　他	『飯田における古墳の出現と展開』	飯田市教育委員会	2007
青木美智男	『近世信濃庶民生活誌　信州あんずの里名主の見たこと聞いたこと』	ゆまに書房	2008
倉地克直	『全集　日本の歴史　第11巻　徳川社会のゆらぎ』	小学館	2008
信濃史学会	『長野県民の戦後60年史』	信毎書籍出版センター	2008
新谷尚紀	『先祖供養のしきたり』	ベスト新書	2008
結城康博	『介護：現場からの検証』	岩波書店	2008
渡辺尚志	『百姓の力　江戸時代から見える日本』	柏書房	2008

協力者・協力機関（50音順）

会津美里町教育委員会
青木敏夫
安茂里デイサービスセンター
飯田市教育委員会
和泉市久保惣記念美術館
市川信一
井戸尻考古館
(財)永青文庫
岡谷美術考古館
北相木村教育委員会
京都府京都文化博物館
公文教育研究会
恵愛学園
河野　実
香原志勢
国立歴史民俗歴史博物館
小林ぎん子
小林史広
栄村教育委員会
佐久市教育委員会
三帰寮
澁谷恵美子
(財)島田美術館
下條村役場
称願寺
須坂市立博物館
専修大学図書館
知恩院
千曲市森将軍塚古墳館
尖石縄文考古館
天龍村役場
東京国立博物館
中野市歴史民俗資料館
(財)長野県埋蔵文化財センター
長野市保健福祉部高齢者福祉課
長和町教育委員会
西沢寿晃
原村教育委員会
平出一治
風俗博物館
藤田　敬
藤森英二
(財)本間美術館
松代文化施設等管理事務所
松本市役所
三村一夫
明治大学博物館
泰阜村役場
山梨県立歴史博物館

あとがき

この本を読んで、もっと知りたいことが出てきたら、ぜひ県立歴史館へ来てください。収蔵しているたくさんの資料や、書籍を見ることができます。

また、歴史を専門に研究している職員がいるので、わからないこと、調べたいことがあれば、職員に質問してください。疑問の解決の方法や資料の調べ方を丁寧にお答えします。

最後になりましたが、本書のために貴重な資料や写真などを快くご提供くださった多くの方がたに厚くお礼を申し上げます。

2009年3月

長野県立歴史館

執筆者・編集者（五十音順）

大竹憲昭	滝澤正幸	中嶋常博	平野誠
片桐正道	竹下良太郎	長井丈夫	福島正樹
岸田恵理	舘林弘毅	成竹精一	前澤健
黒岩龍也	土屋積	西山克己	水沢教子
児玉卓文	傳田伊史	原明芳	村石正行

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時30分まで）

休館日 毎週月曜日（祝日、振り替え）と祝日の翌日
12月28日～1月3日、その他館長が定める日

常設展観覧料 一般300円（200円）、高・大学生150円（100円）、小・中学生70円（50円）／（　）内は団体20名以上
また次に該当する場合は観覧料が無料になります。
・小・中・高・特別支援学校生が土曜日、日曜日、国民の祝日および振り替え休日に観覧するとき。
・身体障害者手帳などの交付を受けている方と、介護の方が観覧するとき。
・県内の小・中・高校生が学校の教育活動として観覧するとき。この場合申請が必要ですが、申請書類は当館ホームページでも手に入れることができます。

交通案内 しなの鉄道屋代駅から徒歩25分、屋代高校前駅から徒歩25分
長野電鉄屋代線東屋代駅から徒歩20分
長野自動車道更埴I.Cから車5分
高速道路バス「上信越道　屋代」から徒歩3分

長野県立歴史館

信濃の風土と歴史⑮

命 いのち －生と死－

2009年（平成21）3月26日発行

編集・発行 長野県立歴史館
〒387-0007　長野県千曲市大字屋代字清水260-6
電話 026-274-2000（代）
FAX 026-274-3996
ホームページ http://www.npmh.net
印刷 株式会社プラルト
〒399-0033　長野県松本市大字笹賀5985

092
Sh 59
15